

日本語の再発見

言葉が人間を人間にする

一九二〇年、インドのカルカッタに近い、ゴタムリといふ村で、狼に育てられた二人の少女が発見された。二人を発見し、これを救ひ出したのはシング牧師である。アマラと名付けられた少女は間もなく死んだが、カマラと名付けられた少女は、その後およそ十年間生きて、推定年齢十七歳まで、シング牧師夫妻の手で養育された。

その育児記録に依ると、乳児期から幼児期を通して狼に育てられたからであらう、四つ足になって走り回り、足で立って歩くことを教へても、なかなか改めることが出来なかったことが報告されてゐる。言葉が一言も話せなかったことは言ふまでもない。

食事の時には四ん這ひになって、食べ物を口で直接に食べた。昼は部屋の隅で寝てゐることが多く、夜になると起き上って遠吠えをしたと言ふ。育ての親である狼の真似をするといふ学習の結果である。

その中で、最も私が興味深く思ったことは「人間らしい感情を全く見せなかった」と報告されてゐることである。彼女は、どんなに喜ぶべきことがあつても決して笑つたことが無く、また、どんなに悲しいことがあつても涙一つ流して泣いたことが無かつた、といふのである。

シング牧師は、言葉の教育にも努めたのにも関わらず、その習得状

況が極めて悪く、糖尿病で死ぬまでのおよそ十年間にわたる学習で、習得した言葉の数は僅かに四十五語に過ぎなかつたと報告されてゐる。

然し、僅か四十五語の習得でも、日常会話が出来うやうになり、それからは、嬉しい事がある時には笑顔を見せるやうになり、また、悲しい時には涙を流して泣いたこともあつた、といふことである。

このやうに、言葉を全く理解してゐなかつた時には人間らしい感情が全く無かつたのにも関わらず、言葉を覚え、言葉が使へるやうになるにつれて、人間らしい感情が芽生へ、そして育つて行つたのである。まことに言葉は人間を人間にする働きを有つたものであることがよく解る。私たちは、この点に注目する必要があると思ふ。

人間は、喧嘩をする時には自然と乱暴な言葉を使ふものである。優しい言葉を使つてみたのでは喧嘩にならない。荒々しい心は荒々しい言葉を生むが、その反対に、荒々しい言葉は荒々しい心を作り出すものでもある。だから、人間らしい人間になるためには、何よりも先づ人間らしい言葉が、とりわけ美しい言葉が必要なのである。